

1989年出土の木簡



(彦根東部)

-

ころである。遺跡の東側には標高は八七・五m前後を測る。さらに遺跡の西方約一kmには琵琶湖が望まれる。筑摩仙遺跡の発掘調査は、国道八号線バイパスの建設天野川の旧自然堤防上に上多良、中多良、下多良の集落が立地している。遺跡の地目は水田で、現地表面の

遺跡の種類	遺跡の種類
遺跡の年代	遺跡の年代
遺跡及び木簡出土遺構の概要	遺跡及び木簡出土遺構の概要

ころである。遺跡の東側には天野川の旧自然堤防上に上多良、中多良、下多良の集落が立地している。遺跡の地目は水田で、現地表面の

標高は八七・五m前後を測る。さらに遺跡の西方約一kmには琵琶湖が望まれる。

筑摩佃遺跡の発掘調査は、 国道八号線バイパスの建設

滋賀・筑摩佃遺跡

に伴うもので、米原町教育委員会が一九八九年度に実施したものである。

工的な大溝や土坑群等の遺構が検出された。さらにこれら遺構面の上層に多量の遺物を含む包含層が二層堆積していた。上層の包含層は現地表面下一m付近に四〇cmの厚さで堆積しており、土質は琵琶湖周辺の遺跡に多く認められる植物の腐蝕土（いわゆるスクモ層）で、包含されていた遺物は縄文時代早期から奈良時代に至るものであった。下層の包含層はこのスクモ層の下に四〇cmほどの厚さで堆積しており、土質は礫まじりの粘土で、遺物は縄文時代早期から古墳時代後期に至るものであった。

8 木簡の釈文・内容

米「」
我「」
「」
（侧面）
(319)×26×19 0611

(1)は本来、木槌等の柄であったと推定され、断面が上端部で長方形となり、下端部に向うにしたがって円形となる。上端部には粗い削り込みが表裏両面より施され、先端に向って尖り、下端部はまるくおさめている。両端部に少し焼けた痕跡が認められる。文字は三面に記されており、達筆である。裏面の文字は中央の二文字が表面と同方向である以外は、すべて下端部から上端部に向って記されている。この表面と同方向で記された二文字は異筆である。左側面に記された文字も裏面同様、下端部から上端部に向って記されている。内容としては同じ文字が連書されており、おそらく習書木簡と見られる。なお「得」「是」「衆」などの文字が目立つことから、習書の手本として仏典を用いたのではないかと考えられる。

もう一点は○三二型式の木簡の形態を有する (191×40×3)。表裏両面に草書状の墨痕は認められるが、おそらく文字にはならない。用途は不明であるが、筆ならしに用いたものではないかと考えられる。

なお周辺に目を向けると、南方三〇〇mに位置する下定使遺跡では、奈良時代の掘立柱建物群が検出され、「飯」「穴太口」「富」などの墨書土器や円面硯、木履、下駄などの木製品が出土している。また筑摩佃遺跡の東に隣接する蘭華寺遺跡からは奈良時代の布目瓦や須恵器が出土している。さらに南西1kmの地点に位置する筑摩湖岸遺跡は、宮内省大膳職(後に内膳司へ移管)に所属する筑摩御厨跡に比定されており、墨書土器、綠釉、風字硯や刀子、神功開宝などが出土している。この筑摩御厨については、平安時代に在地豪族の息長氏が御厨長となっていることが知られている。当時低湿地であった筑摩佃遺跡周辺には、御厨に関連する施設や、そこに出仕する官人・在地豪族の居宅などが点在していた可能性を含め、今後の検討に待ちたい。

(中井 均)